茨城県那珂郡緒川村埋蔵文化財調査報告書第２集

松原遺跡

平成４年２月

松原遺跡発掘調査会

茨城県那珂郡緒川村埋蔵文化財調査報告書第２集

松原遺跡

平成４年２月

松原遺跡発掘調査会

第２号住居跡出土　漆塊の残る坏

第３号住居跡出土　墨書土器

序

松原遺跡は，本村の東部を流れる緒川を西南に望む高台の県立小瀬高等学校の校地内にあります。

この度，同校の校庭再編整備事業の実施に伴い，遺跡の全面的な発掘調査を実施いたしました。

この調査によって，平安時代の竪穴住居跡６軒をはじめ，掘立柱建物跡１棟などが発掘されました。これらの遺構から出土した土器の中に，墨書土器片３点，漆皿として利用された坏数点が発見されました。また，この地で採取できる白谷石を利用した竈など，数多くの遺物が発掘されたことは，古代の人々の生活を知る上で大変貴重な資料になるものと考えます。

ここに，発掘調査報告書を発刊するにあたり，多くの人々が遺跡に対する関心をより高め，文化財に対する認識と愛護の精神が一層深められることを期待しております。

終りに，今回の発掘調査に対し，全面的なご理解と御指導をいただきました県教育庁文化課のご厚意と，主任調査員の萩原義照先生をはじめ関係各位のご協力に心から感謝申し上げます。

平成４年２月

松原遺跡発掘調査会会長　岡　崎　　実

例　　言

1　本書は，平成３年６月10日から７月20日にかけて実施した茨城県那珂郡緒川村大字上小瀬字松原1885外に所在する松原遺跡の発掘調査報告書である。

2　この発掘調査は，茨城県立小瀬高等学校校庭再編整備事業に伴う発掘調査である。

3　調査は，緒川教育委員会が松原遺跡発掘調査会を組織し，本調査会が主体となって実施した。調査会の組織は，次のとおりである。

会　長	岡崎　実	理　事	川上　博	監　事	古内浩平
副会長	石川　豊	〃	内田義勝	〃	内田尚文
理　事	高井良男	〃	飯嶋　武	幹　事	堀江久雄
〃	小野関雄	主任調査員	萩原義照	〃	本橋　守

4　本報告書の執筆・編集は，調査主任萩原義照が中心となって行った。

5　本書の，遺構・遺物実測図の作成方法と記載方法は次のとおりである。

- 遺構の平面図・断面図・土層図は，原則として1/20の原図をトレースして版組し，それをさらに1/3に縮少して掲載した。
- 竈は，1/10の図面をトレースして版組し，それをさらに1/3に縮少して掲載した。
- 土器の実測は，四分割法を用い，中心線の左側に外面，右側に内面及び断面を表した。
- 土器の実測図中，断面を黒く塗り潰したものは須恵器，黒網を施したものは黒色処理を表す。
- 遺物実測図は，縮尺1/3で掲載した。

6　覆土及び遺物の色調は，「新版標準土色帖」（農林省農林水産技術会議事務局　監修）による。

7　本書の執筆に当たり，茨城県立歴史館川井正一氏より出土品の整理についてご指導とご協力を頂いた。特記して謝意を表したい。

8　調査及び本書の作成に当たり，県教育庁文化課の指導・助言を得た。また，次の機関からご協力・ご教示を頂いた。衷心より感謝の意を表する次第である。（順不同）

県立小瀬高等学校　　緒川村教育委員会　　財団法人茨城県教育財団　　県教育庁財務課

9　発掘調査及び整理に当たっては，次の方々にお手伝いをいただいた。（順不同）

発掘調査	須田　進	発掘調査	仲田　静江	発掘調査	本橋　美之
〃	森嶋　進	〃	内田　勝子	〃	大武　由紀
〃	岡崎　文夫	〃	長山　昇		
〃	岸　元春	〃	長嶋　光行	整　理	館　千代子

目　　次

序
例　言
第１章　調査経緯……1
　第１節　調査に至る経過……1
　第２節　調査経過……1
第２章　位置と環境……3
　第１節　地理的環境……3
　第２節　歴史的環境……4
第３章　遺構と遺物……7
　第１節　遺跡の概要……7
　第２節　遺構と遺物……7
　　１　竪穴住居跡……9
　　第１号住居跡……9
　　第２号住居跡……11
　　第３号住居跡……13
　　第４号住居跡……20
　　第５号住居跡……20
　　第６号住居跡……22
　　２　掘立柱建物跡……22
　　第１号掘立柱建物跡……22
　　３　土坑……24
　　第１号土坑……24
第４章　まとめ……25
写真図版

挿　図　目　次

第１図　遺跡の位置及び周辺地形図……６
第２図　遺構配置図……８
第３図　第１号住居跡出土遺物実測図……９
第４図　第１号住居跡実測図・
　　遺物出土状況図……10
第５図　第２号住居跡実測図……12
第６図　第２号住居跡出土遺物実測図……12
第７図　第３・６号住居跡実測図……14
第８図　第３号住居跡遺物出土状況図……15
第９図　第３・６号住居跡竈実測図……16
第10図　第３号住居跡出土遺物実測図……19
第11図　第４号住居跡実測図……20
第12図　第５号住居跡竈実測図……21
第13図　第５号住居跡出土遺物実測図……21
第14図　第１号掘立柱建物跡実測図……23
第15図　第１号土坑実測図……24

表　目　次

第１号住居跡出土遺物観察表……11
第２号住居跡出土遺物観察表……13
第３号住居跡出土遺物観察表……17
第５号住居跡出土遺物観察表……21

写真図版目次

ＰＬ-1　松原遺跡遠景，第１号住居跡全景，第１号住居跡遺物出土状況，第２号住居跡全景，第２号住居跡遺物出土状況，第３号住居跡全景，第３号住居跡遺物出土状況
ＰＬ-2　第３号住居跡竈全景，第５号住居跡竈全景，第１号土坑全景，第１号掘立柱建物跡確認状況
ＰＬ-3　第１・２・３号住居跡出土遺物
ＰＬ-4　第３・５号住居跡出土遺物

第１章　調査経緯

第１節　調査に至る経過

茨城県教育委員会は，平成３年度事業の一つに県立高等学校の農業科廃止に伴う校庭再編整備事業を計画したが，その中に県立小瀬高等学校の実習地が含まれていた。

当該地には，県登録4798番の松原遺跡が所在していたところから，事業担当課である県教育庁財務課は平成３年１月初旬に同庁文化課に対し松原遺跡の取扱いについて協議した。

文化課では緒川村教育委員会と連絡をとり合う一方，課内検討をふまえて遺跡の保存を図るべく，工法の変更等を含めた計画の見直しを求めるとともに現地踏査を実施し再三再四協議を重ねた。しかしながら，狭い校庭を拡張してグランド整備をする計画であり，地形上の制約等から１～２ｍほどの切土・盛土を避けられない内容であるため遺跡の現状保存は困難と判断され，やむなく記録保存の措置をとることで協議が調った。

平成３年３月中旬に４日間にわたる範囲確認の試掘調査が実施され，その結果をもとに年度あけの４月，財務課，小瀬高等学校，文化課及び緒川村教育委員会の間で本調査についての協議をすすめた。

茨城県教育委員会教育長は，平成３年４月16日付，財第296号で文化保護法第57条の3にもとづく埋蔵文化財発掘（土木工事等）通知書を文化庁長官に提出した。

５月に入って緒川村教育委員会は本調査に向けての諸準備をすすめ，６月に松原遺跡発掘調査会を発足させるとともに，平成３年６月４日付，松第１号で文化財保護法第57条第１項にもとづく埋蔵文化財発掘届を文化庁長官に提出し，６月10日に安全祈願祭をとり行い発掘調査に入った。

第２節　調査経過

松原遺跡の発掘調査は，平成３年６月10日から同年７月20日にかけて実施した。

以下に，調査経過の概要について，日を追って記述する。

平成３年６月10日　緒川村教育長，村文化財保護審議会委員他参列のもとに，現地で安全祈願祭を実施する。午後から遺構確認作業を開始し，竪穴住居跡５軒，掘立柱建物跡一棟の存在を確認する。

12日　第３号住居跡の掘り込みを開始する。内面黒色処理された土師器片が数多く出土し，本跡が平安期の集落であることを予想させる。

13日　昨日に引き続き第３号住居跡の掘り込みを行うと共に，第１号掘立柱建物跡の調査を開始する。

15日　第２号住居跡の掘り込みを開始して間もなく，漆塊の入った坏を発見する。
引き続き，第３号住居跡，第１号掘立柱建物跡の調査を進める。

15日　第１号住居跡の掘り込みを開始する。小瀬高等学校生徒が，遺跡調査を見学する。

18日　小瀬小学校５・６年生，小瀬高等学校生徒が，遺跡調査を見学する。

19日　第１号住居跡の土層調査，第２号住居跡の全景写真撮影を行う。緒川中学校１・２年生が，遺跡調査を見学する。

27日　第１号掘立柱建物跡の調査を終了する。第４号住居跡の掘り込みを開始し，土層調査まで進む。

29日　前日の大雨の影響により遺構調査が困難であるため，遺物の洗浄を行う。
第３号住居跡から出土した遺物の中に，「依」の墨書を持つ土師器片を発見する。

７月３日　第１号住居跡の調査を終了し，貼床下に確認された第１号土坑の調査に入る。
第３号住居跡の床面を精査し，柱穴等の掘り込みを行う。

８日　第２号住居跡及び第１号土坑の調査を終了する。

15日　第４号住居跡の調査を終了する。第５号住居跡の調査を行う。

17日　各遺構の清掃をし，午後１時30分から現地説明会を開催する。村民を中心に，約20名が参加する。

20日　第３号住居跡の平面図，断面図を作成した後，当跡の床面から検出された第６号住居跡の竈の調査を実施する。
本日をもって，松原遺跡の発掘調査を完了する。

第２章　位置と環境

第１節　地理的環境

松原遺跡は，那珂郡緒川村大字上小瀬字松原1885外に所在する。遺跡は茨城県立小瀬高等学校敷地の一部，旧実習農場跡地に立地している。

緒川村は，県の北西部に位置し，西方は栃木県那須郡烏山町・同芳賀郡茂木町に続いている。北は那珂郡美和村，東は同郡大宮町に，南は東茨城郡御前山村にそれぞれ接する。緒川村の地形の大部分は山地で，鷲子山（454m）・尺丈山（512m）を主体とした，いわゆる八溝山地の一部を形成している。村の総面積は56.55㎢で，東西9.7km･南北9.8kmの不整形の四辺形を呈している。主な山地としては，西部山地に高岩山（317.3m）・内獄山（334m）。中部山地は，権現山（284.2m）・猿額（269m）・小舟富士（273.1m）などの山々がある。美和村との境には，村内の最高峰見沢岳（341.4m）を中心とした北部山地がある。また大宮町を境界する東部山地には，高館山（229.3m）が目立っている。那珂川に近づくにつれて，山地は次第に低く浸蝕も一段と進んでいる。この様にして，緒川村の地形を概観すると，北東部は高く，南東部は低くなるという傾向がみられる。

村の東部を貫流する緒川の水源は，北隣りの美和村鷲子山麓に発して東に流れ，上桧沢から南に方向を転じ，蛇行しながら上小瀬本郷に入り，南下して南東から御前山村野口で，那珂川に合流する。緒川は全長35kmその河岸流域地帯に，耕地や集落が発達している。村内の遺跡の大半は河岸段丘の台地上に所在する。

緒川村の地質は，第４紀層の上に堆積してできたのが，現在の地層で，その基底層に第３紀層中世層が形成されている。特に千田の猿久保礫岩は中世層の代表的なもので，村役場玄関前にその標本が据えられてある。松原遺跡の所在する上小瀬地区は，小見野層と呼ばれる地層で，凝灰岩・安山岩質よりなっている。なかでも質の良い灰白色石英質凝灰岩は、白谷石とも呼んで，建築用材として採掘されたこともあるといわれている。今回の調査によって，検出された竪穴住居跡の竈構築に，この白谷石が用いられてあったことは注目に値する。

緒川村の成立は，明治22年（1889）町村制の施行によって，自然環境及び人情，風俗の似る旧上小瀬村・旧下小瀬村・旧那賀村・旧国長村・旧小玉村の５か村が合併して小瀬村が，また同じように，旧小舟村・旧大岩村・旧油河内村・旧入本郷村・旧千田村・旧吉丸村・旧松之草村・旧小瀬沢村の８か村が合併して八里村がそれぞれ誕生した。のち昭和31年（1956）新町村合併促進法によって，ここに立地条件を同じくする「小瀬村」と「八里村」の２村を合わせ，新村を縦貫して流れる「緒川」を村名として，新生緒川村が成立し現在に至っている。

第２節　歴史的環境

緒川流域には，原始から中世にわたる人々の生活の跡（遺跡）が分布している。緒川の河岸台地や山麓には豆入平遺跡・本郷遺跡（昭61・一部調査）や，上の台遺跡・松原遺跡等が所在する。下って川崎遺跡，那賀上台の陣向遺跡・梶内遺跡などがある。そのほか緒川支流の周辺台地には，小舟上の平遺跡，小玉川流域の国長平遺跡・堂の入遺跡等が，埋蔵文化財包蔵地として，緒川村遺跡台帳に登載された周知の遺跡である。

弥生時代から古墳時代にかけての遺跡は，今のところ確認されていない。今回調査した松原遺跡からは，古代の竪穴住居跡や，掘立柱建物跡が検出された。（遺構・遺物の項参照）

本遺跡の所在する緒川村は，古代那賀郡に属し，那賀皇都原（緒川村大字那賀字百合ケ作）は那珂国造建貸間命の遺跡に擬されている。（『新編常陸国誌』＝上古コノ地ニ居住セシモノト見ユ云々）律令制下常陸国那賀郡となったが，のちの郡名の「賀」を改めて「珂」の字をあて，那珂郡とし現在に至っている。

平安時代に那珂郡は，那珂東郡・那珂西郡・吉田郡の３区に分かれた。緒川の流域及び那珂川以北・以東の河岸地域が那珂東郡に入った。

中世藤原姓那珂氏（藤原通資）が，那賀（緒川村上小瀬字御城）に居城し，子孫累代那珂東郡を支配した。建武中興から南北朝の争乱に際し，南朝宮方に味方した那珂城主那珂通辰は，鎮守府将軍北畠顕家軍に従軍し，北朝武家方（足利氏）討伐のため各地に転戦した。延元元年(1336)郷里那珂城に在ったが，瓜連城の楠木正家と共に，常陸武家方の棟梁佐竹貞義の大軍と，久慈・那珂地方に戦い，遂に増井の独松峰（常陸大田市）に自刃して果てた。明治40年11月14日，南朝忠臣那珂通辰に正四位が追贈せられた。那珂氏累代の城跡，特に那珂通辰の遺跡は，紛もなく緒川村那賀の那珂城跡であることを，本報告書に併せて顕彰したい。

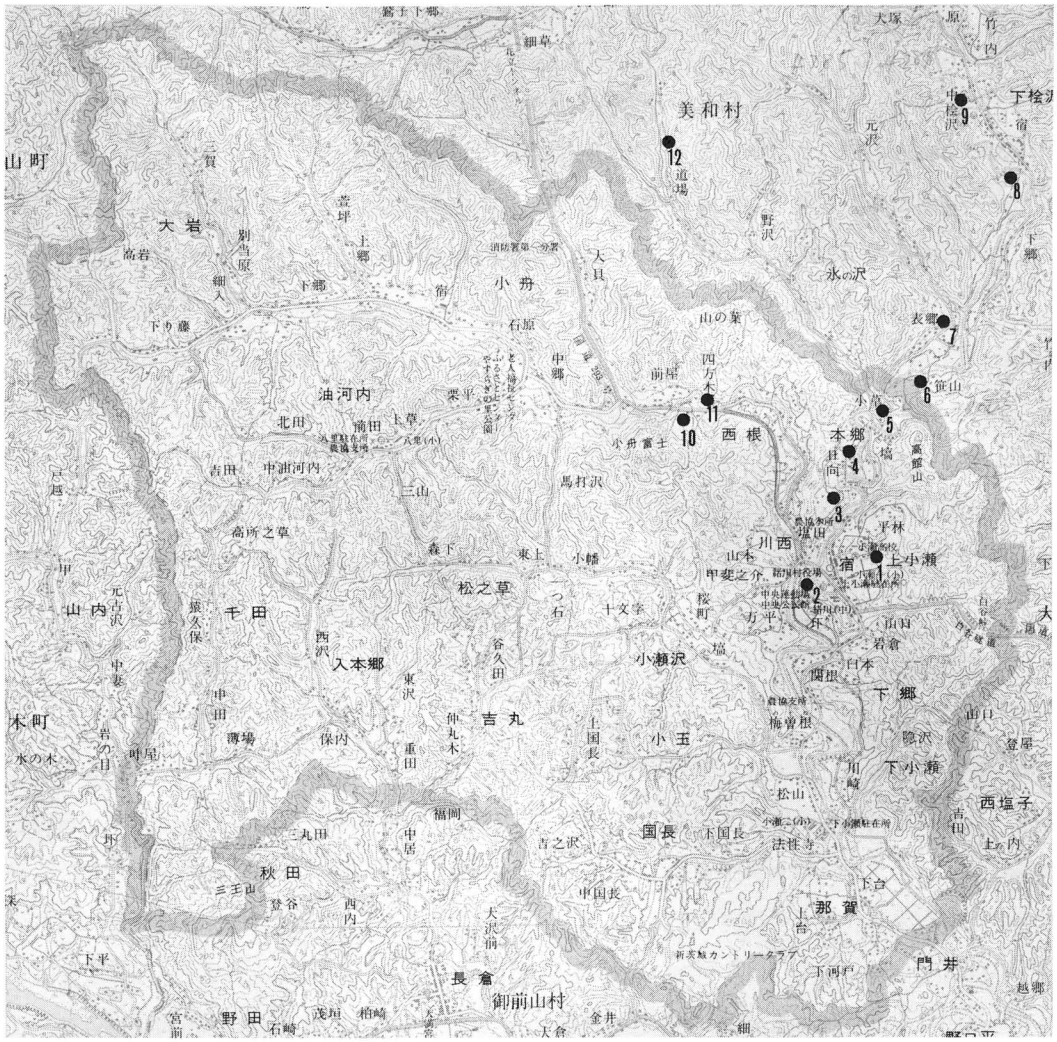
那珂氏滅亡後の小瀬地方を支配したのは，佐竹貞義の３男義春で，小瀬三郎義春と称し上小瀬の本御所に居城した。そのほか「りゅうがい山」・「館の山」また上小瀬本郷の高館山等はいづれも小瀬城跡関連の城館跡である。下小瀬に在る川崎城跡は，小瀬城の出城で義春の２男孫二郎の居城した所といわれる。のち慶長７年（1602），本家佐竹義宣秋田21万石の領主として久保田城へ移され，小瀬義春も共に秋田へ随行した。

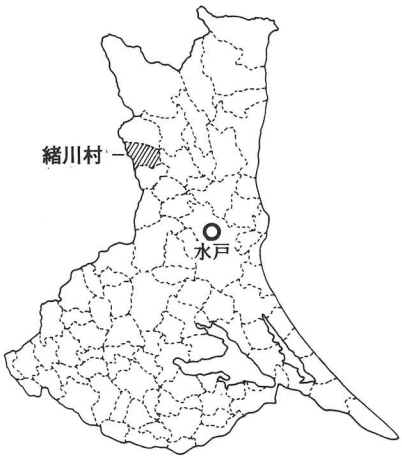
小瀬城跡のほかに，小舟の寺山に所在した小船城跡については，その築城・城主などについては不明である。また大岩の下がり藤にも，中世の山城跡が見られるが，その事跡などよくわからない。

江戸時代に入って，幕末に至るまでは，水戸徳川氏に支配された。現大字は旧幕当時の村々であったが，明治22年小瀬・八里の２村に統合し，更に昭和31年緒川村が誕生し現在に至っている。

参考文献

- 「緒川村誌」緒川村村誌編さん委員会　1982
- 「本郷遺跡発掘調査報告書」緒川村教育委員会　1986
- 「大子町史　写真集」大子町史編さん委員会　1980
- 「新編常陸国誌」（中山信名修　栗田寛補）　崙書房　1976
- 「茨城県史　原始古代編」茨城県　1985





1．松原遺跡
2．小瀬城跡
3．上の平遺跡
4．本郷遺跡
5．豆入平遺跡
6．笹山遺跡
7．久龍遺跡
8．下桧沢遺跡
9．中桧沢遺跡
10．上の平遺跡
11．四方木平遺跡
12．六反遺跡

第 1 図　遺跡の位置及び周辺地形図

第３章　遺構と遺物

第１節　遺跡の概要

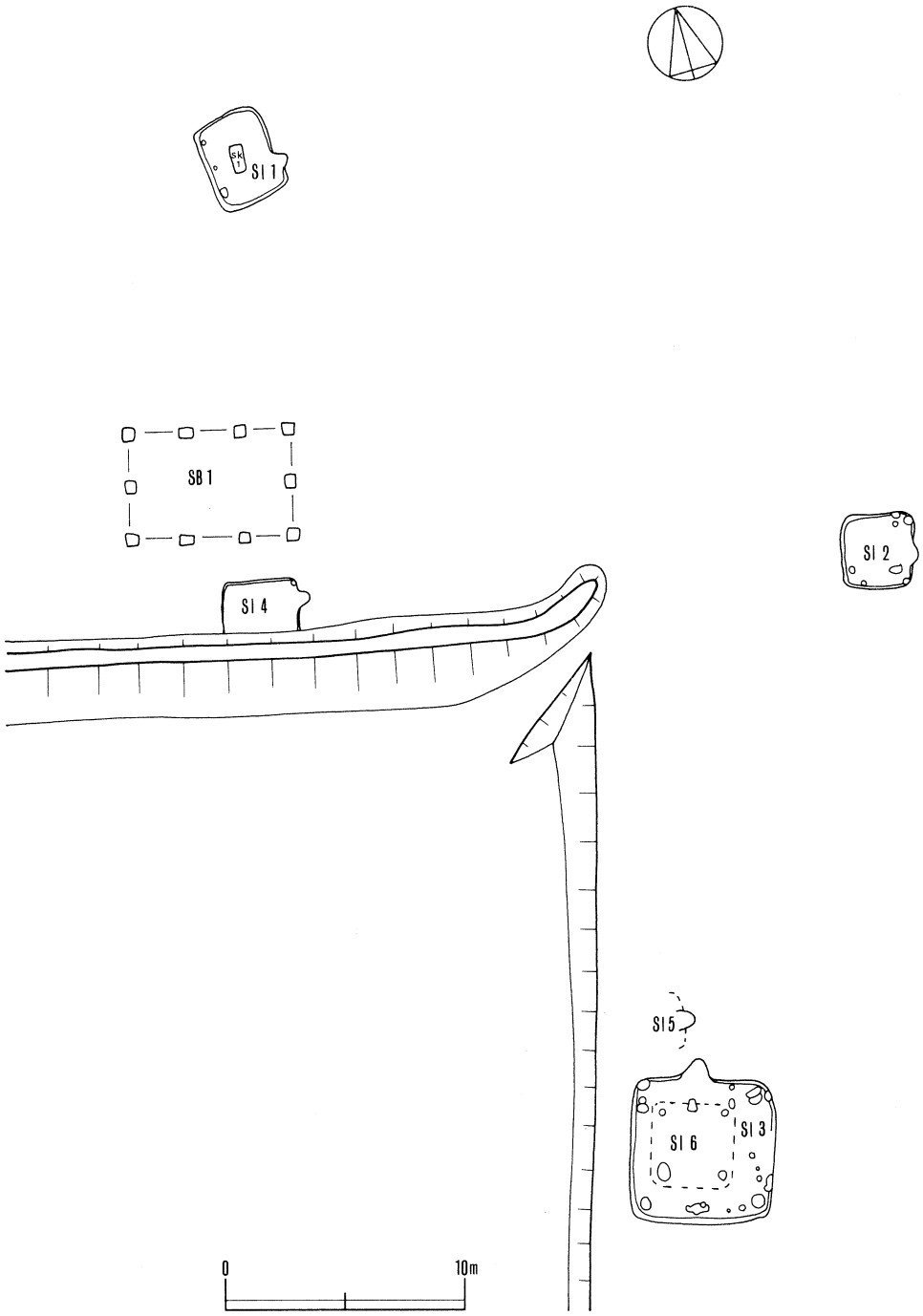
松原遺跡は，八溝山脈山裾の標高100ｍほどの台地上に位置し，県立小瀬高等学校旧実習農園跡地内に所在する茨城県遺跡番号4798番の周知の遺跡である。

県立小瀬高等学校の校庭再編整備事業に伴う今回の発掘調査の結果，竪穴住居跡６軒，掘立柱建物跡１棟，土坑１基が検出された。

住居跡は，いずれも平安時代（９世紀）のもので，台地南縁辺部に分布している。中でも，工房的な性格を窺わせる第２号住居跡と，本集落の中心的な存在と目される第３号住居跡は，注目に値するものである。掘立柱建物跡は，３間×２間の東西棟で，時期を決定づける遺物は出土していないが，住居跡群に接して検出されていることから，ほぼ同時期のものと考えられている。土坑は，第１号住居跡の貼り床の下から検出されたもので，住居跡よりは古いものとされている。

出土遺物は，土師器類が主で，その他には数点の須恵器・灰釉陶器片がある。器種は甕・坏・高台付椀等で，大部分の坏や椀の内面は黒色処理がなされている。注目すべき遺物としては，第２号住居跡から出土した，器内に漆塊が残る坏や，第３号住居跡から出土した，「依」の墨書を持つ土師器片がある。

調　査　風　景



第 2 図　遺構配置図

第２節　遺構と遺物

１　竪穴住居跡

第１号住居跡（第４図）

本跡は，調査区の北部に確認された住居跡で，第２号住居跡の北西側27m に位置している。本跡は，中央部で第１号土坑と重複しているが，同土坑上に貼り床の一部が確認されていることから，本跡の方が新しい。

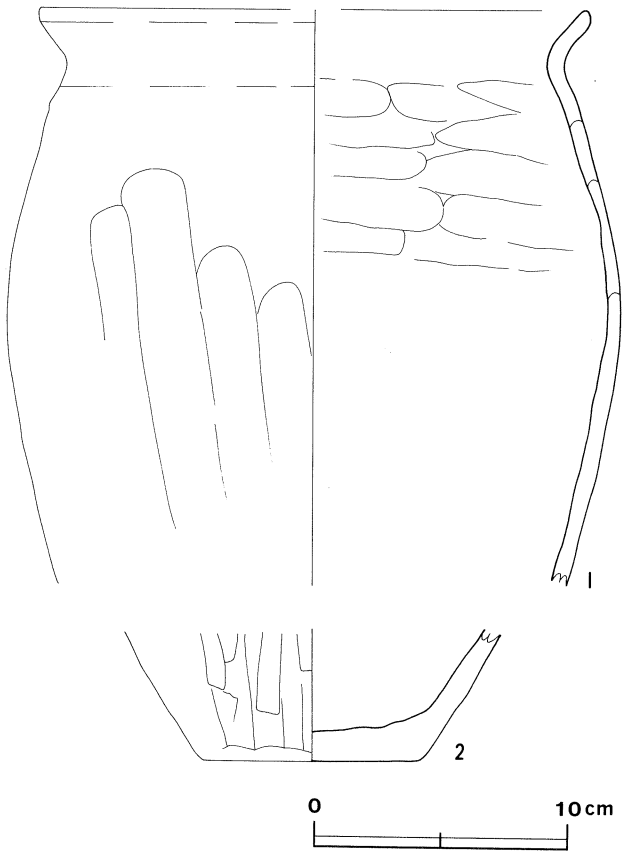
平面形は，長軸3.9m，短軸3.4m のほぼ方形を呈し，主軸方向は，N―７°―Wを指している。壁はロームで，外傾して立ち上がっている。壁高は，東壁が５cmほどであるが，他は10～20cmであり，壁溝は北壁，西壁と南壁の一部に上幅15～27cm，深さ５cmほどで回っている。

床面は，前述したように第１号土坑上には貼り床をして硬く踏み固められており，その周囲は全体的に硬くしまっている。

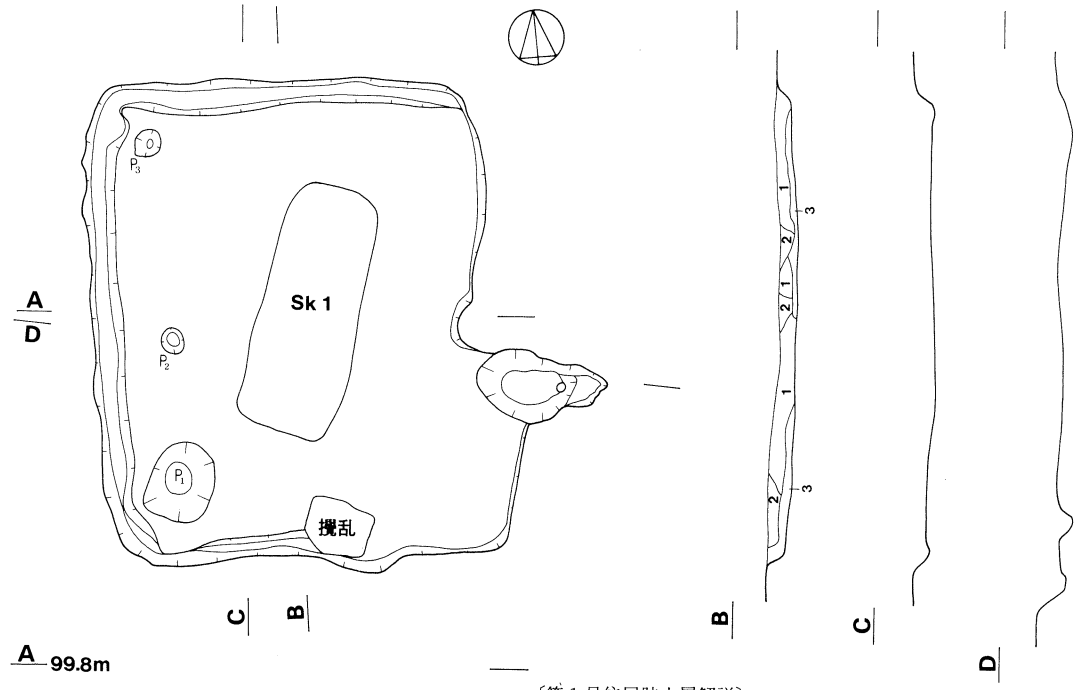
ピットは，３ケ所検出されており，P_1は，長径63cm，短径52cm，深さ20cmで，P_2・P_3は，長径21・23cm，短形20・21cmである。

竈は，東壁の中央部よりやや南側に付設されているが，耕作による攪乱を受けているため形状・規模等の詳細は不明である。覆土は，ローム粒子を少量，焼土粒子を中量含む暗赤褐色土が堆積している。わずかに残存する火床の規模は，長径104cm，短径57cmの不整楕円形を呈し，床面を12cmほど掘りくぼめている。

覆土は，上層にロームブロックを含むローム粒子を多量，焼土粒子を少量含む暗褐色土が，下層には，ロームブロックを含むローム粒子を多量，焼土粒子を極少量含む褐色土が自然堆積している。

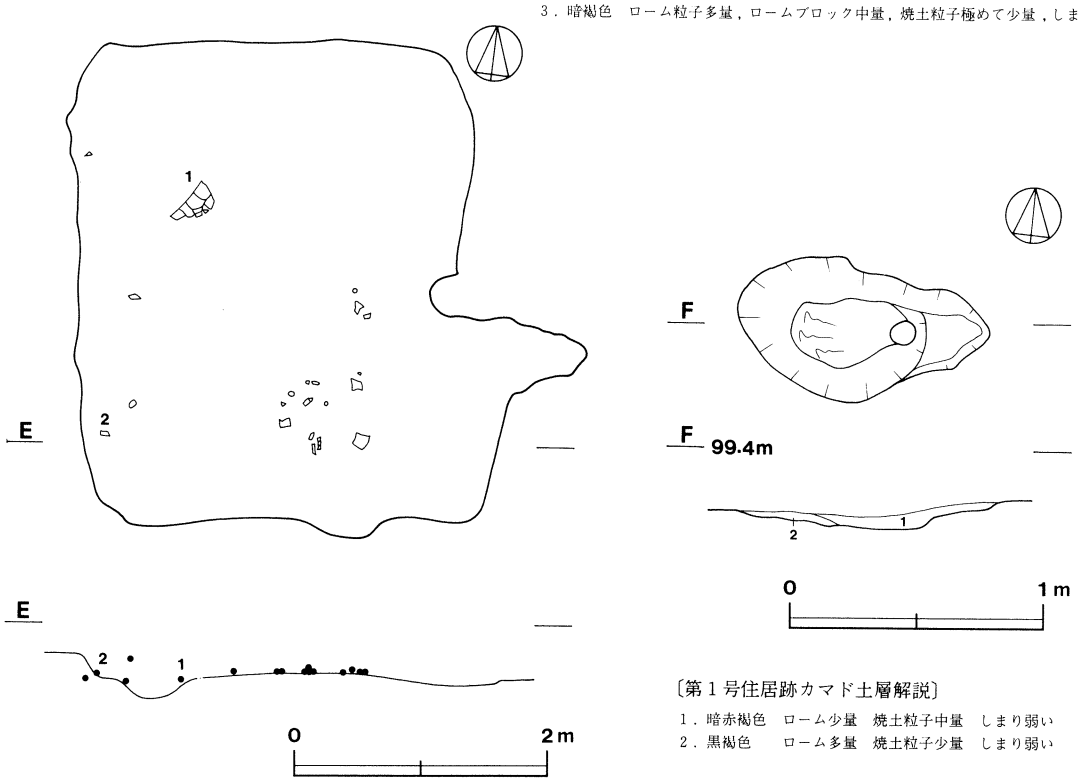


第３図　第１号住居跡出土遺物実測図



〔第１号住居跡土層解説〕

1．暗褐色　ローム粒子多量　ロームブロック中量，焼土粒子少量，しまる
2．黒褐色　ローム粒子極めて少量，しまる
3．暗褐色　ローム粒子多量，ロームブロック中量，焼土粒子極めて少量，しまる



〔第１号住居跡カマド土層解説〕

1．暗赤褐色　ローム少量　焼土粒子中量　しまり弱い
2．黒褐色　ローム多量　焼土粒子少量　しまり弱い

第 4 図　第１号住居跡実測図・遺物出土状況図

遺物は，土師器の甕２点と破片３点が出土している。１は遺構中央の床面にまとまって出土した破片が接合したものである。２は竈の南側の床面から出土したものである。

本跡は，出土遺物から平安時代（９世紀）に比定されるものと思われる。

第１号住居跡出土遺物観察表

図面番号	器　種	法量(cm)	器種の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第３図 1	甕 土師器	A (21.8) B 〔22.8〕 E (24.2)	胴部は内彎しながら立ち上がり，上位に最大径をもつ。頸部は「く」の字状に屈曲し，口唇部は丸い。	口頸部内・外面，ロクロナデ。胴部内面，ナデ。外面上位，ナデ。中位以下，縦位のヘラ削り。	チャート粒・長石 石英・角閃石 黄橙色 普通	30% Ｐ１
第３図 2	甕 土師器	B 〔5.2〕 C 8.7	平底。胴部は外傾して立ち上がる。	胴部内面，横位のナデ。外面，縦位のヘラ削り。	長石・石英・ 角閃石・スコリア 灰褐色 普通	20% Ｐ２

A…口径，B…器高，C…底径，D…高台径，E…胴部最大径，F…高台高，（　）は推定値，〔　〕は現存値

第２号住居跡（第５図）

本跡は，調査エリヤの東部に確認された住居跡で，第１号住居跡の東側22m に位置している。

平面形は，長軸33.5m，短軸30.5m の隅丸方形を呈する。

壁は，ロームで，緩やかに外傾して立ち上がっている。壁高は，西・南壁が10～15cm，北・東壁が５～７cmである。

床面は，平担で，壁際の30～40cmはローム，その外は貼り床である。貼床の下は，10～30cmの深さで荒掘りされている。

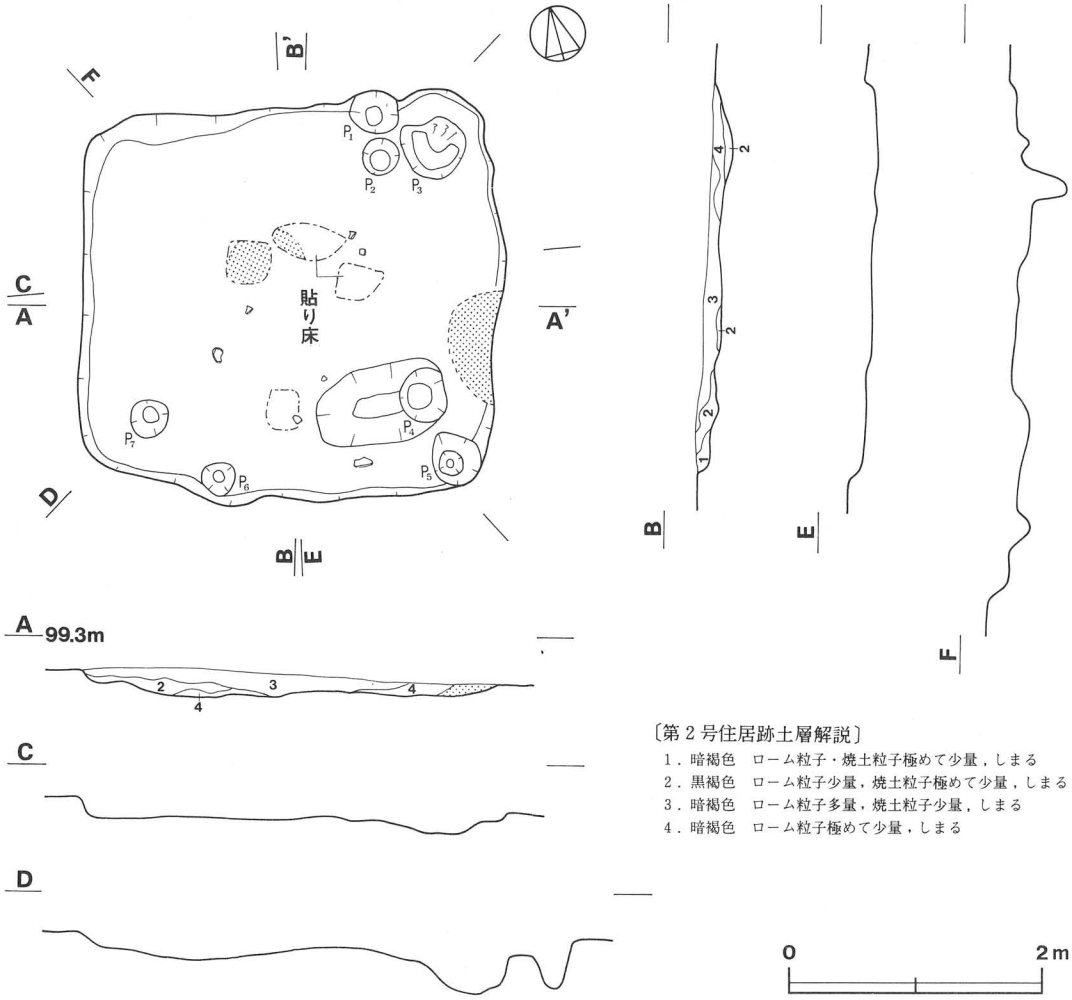
ピットは，７箇所検出された。Ｐ１～Ｐ３，Ｐ５～Ｐ７は，長径25～45 cm，短径20～40 cm，深さ10～36cmである。Ｐ４は，長径105cm，短径60cmの楕円形を呈し，底面は東に向かって傾斜し，最深部の深さは60cmである。

炉は，遺構のほぼ中央に確認され，その部分の床面は，直径35cmの円形状に焼き固まっている。

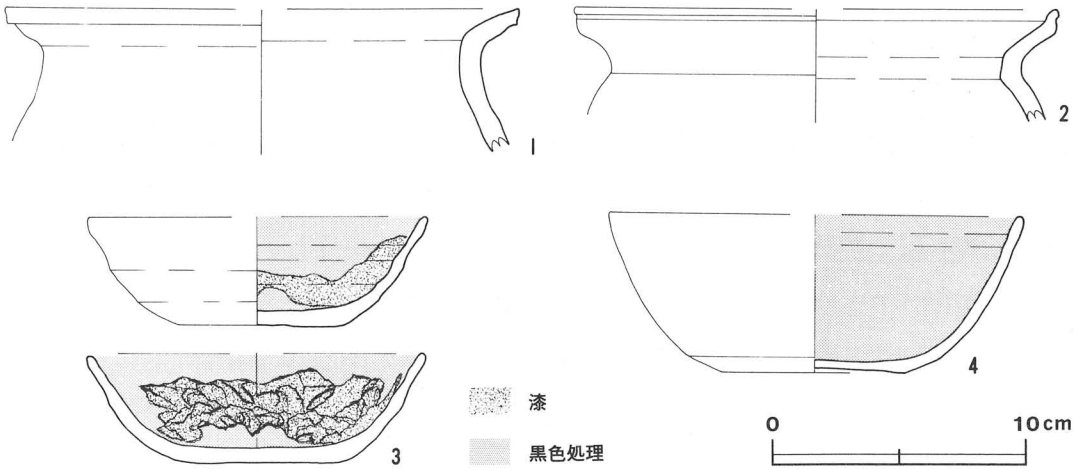
覆土は，黒褐色土及び暗褐色土で，ローム粒子と焼土粒子を少量含んでいる。自然堆積である。

遺物は，土師器の甕１点，坏１点，椀１点と破片101点が出土している。１～３はいずれも床面から出土したもので，３の坏の内部には漆が凝固して残っている。

本跡は，出土遺物から平安時代（９世紀）に比定されるものと思われる。



第 5 図　第２号住居跡実測図



第 6 図　第２号住居跡出土遺物実測図

第2号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第6図 1	甕 土師器	A (20.4) B 〔5.7〕	頸部から口縁にかけて丸みをもって外反し，口縁端部は軽く外上方につまみ上げられる。	口頸部内・外面，ロクロナデ。胴部内面，斜位のヘラナデ。外面，縦位のヘラナデ。	長石・石英・雲母 橙色 普通	10% P1
第6図 2	甕 土師器	A (19.1) B 〔4.5〕	頸部は「く」の字状に屈曲し，口縁端部は外上方につまみ上げられる。	口頸部内・外面，ロクロナデ。胴部内面，横位のヘラナデ。外面，ナデ。	長石・石英・角閃石 褐色 普通	10%
第6図 3	坏 土師器 C 6.4	A 13.4 B 4.3	平底。体部は内彎気味に外傾して立ち上がる。口唇部は丸い。	ロクロ整形(右回転)。内面，ヘラミガキ，黒色処理。体部外面，ロクロナデ。底部，回転ヘラ切り痕を残すナデ。	細砂粒 灰色 普通	60% P3　内部に漆が残存
第6図 4	椀 土師器	A (16.3) B 6.2 C (7.2)	上げ底。体部は内彎気味に外傾して立ち上がる。口唇部は丸い。	ロクロ整形（右回転）。内面，ヘラミガキ，黒色処理。体部外面，ロクロナデ。外面下端と底部は，回転ヘラ削り。	長石・石英・雲母床 にぶい黄橙色　P 良好	50% P4

A…口径，B…器高，C…底径，D…高台径，E…胴部最大径，F…高台高，（　）は推定値，〔　〕は現存値

第3号住居跡（第7図）

本跡は，調査区の南部に確認された住居跡で，第2号住居跡の南西側21mに位置している。本跡は，第6号住居跡と重複しているが，同住居跡の竈を壊して貼り床にしていることから，本跡の方が新しく，また，同住居跡の竈やピットの配列等から増築あるいは改築されたものと思われる。

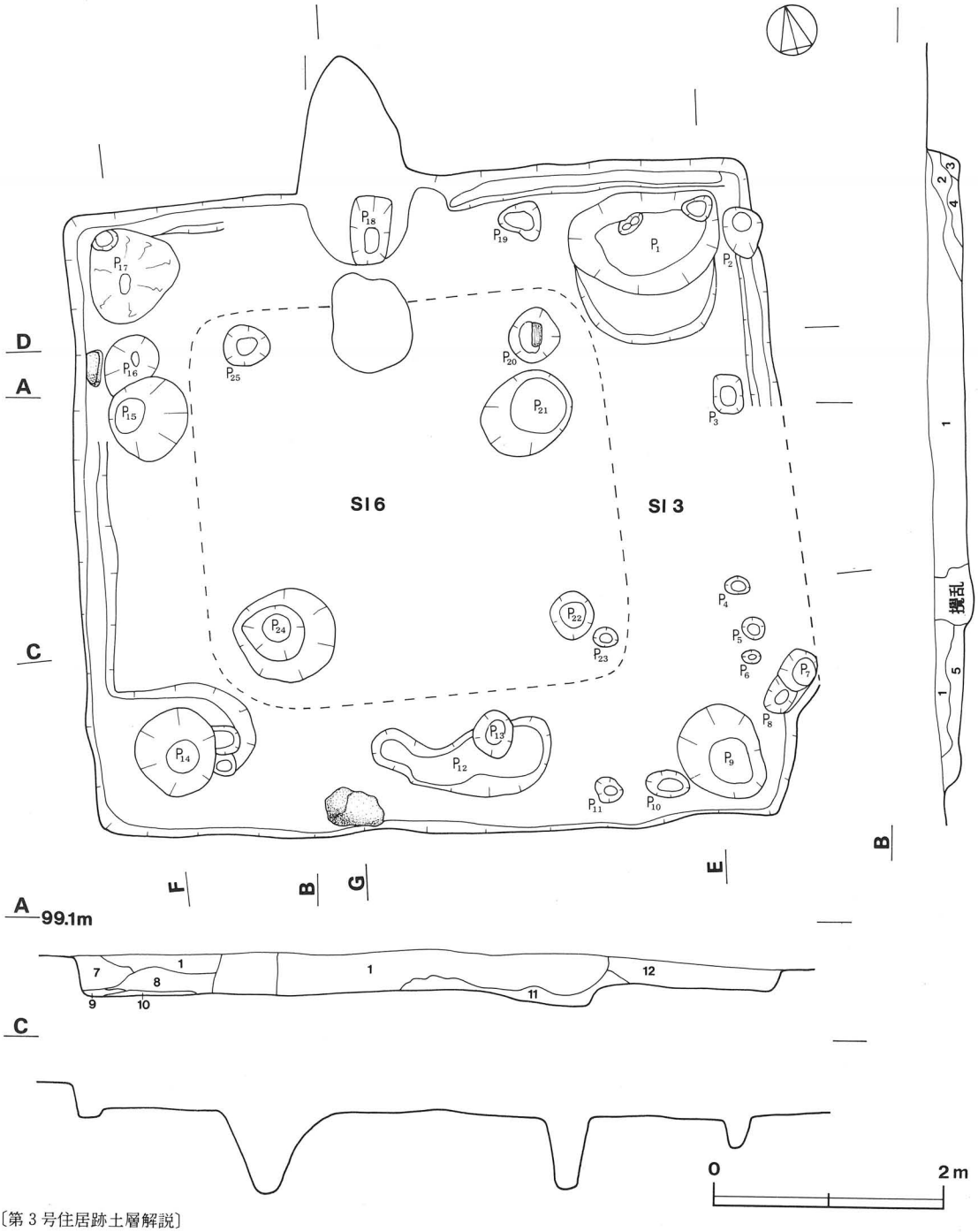
平面形は，長軸6.15m，短軸5.72mのほぼ方形を呈し，主軸方向は，N—5°—Eを指している。

壁は，ロームで東壁の一部が攪乱されているのを除いて，ほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は，14～40cmである。壁溝は，北壁，東壁，西壁の一部に上幅23～33cm，深さ6～13cmで回っている。

床面は，攪乱による東側の一部を除いてほぼ平担であり，P_{20}～P_{25}の内側は貼り床で，農家の土間のように硬く踏み固められている。

ピットは，25ヶ所検出されており，本跡に伴うものは，P_1～P_{19}と思われる。P_1・P_9・P_{14}・P_{17}は，長径74～134cm，短径69～90cm，深さ28～46cmで，規模や配列等から主柱穴と思われる。

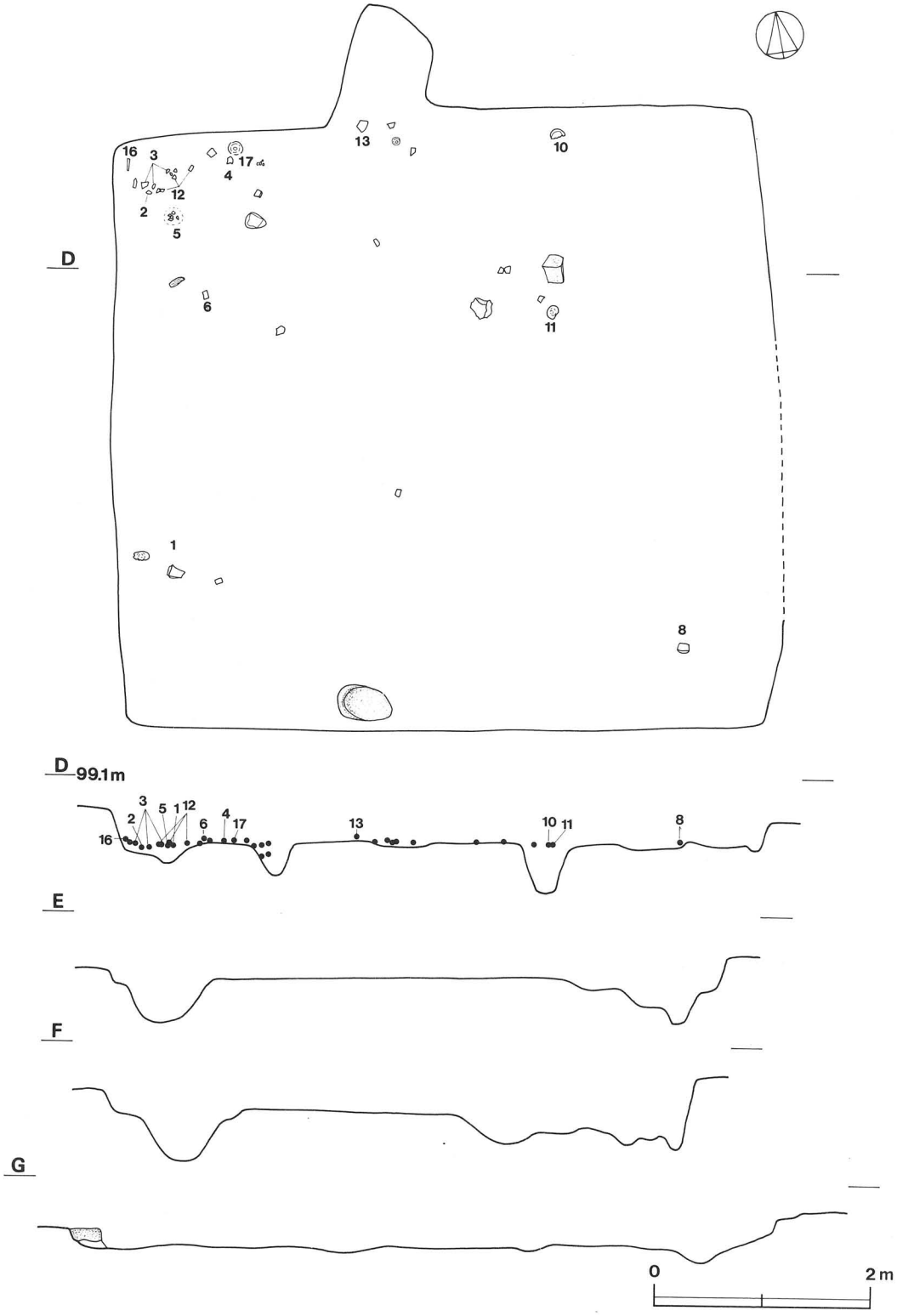
竈は，北壁のほぼ中央部に付設され，天井部と袖部の大半は崩れていたが，砂質粘土で構築されている。奥壁の両側には，長さ25～30cm，厚さ5～13cmほどの白谷石（凝灰岩）がほぼ垂直に埋めこめられて補強材として使用されている。覆土からは多量の焼土粒子が検出されている。長さ182cm・幅114cm・焚口部幅50cmほどである。掘り方は，壁を幅74cmで105cmほど切り込んでいる。火床は，長径25cm・短径18cmの楕円形を呈し，床面を深さ7cmほど掘り込んでいる。



〔第3号住居跡土層解説〕

1　黒褐色　ローム粒子多量，炭化粒子少量，しまる
2．暗褐色　ローム粒子中量，炭化物・炭化粒子・砂粒少量，しまる
3．褐色　砂質粘土・焼土中量，しまる
4．暗赤褐色　砂質粘土・焼土中量，しまる
5．暗褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量，炭化粒子少量，しまる
6．黒褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量，炭化粒子少量
7．黒褐色　ローム粒子多量　炭化粒子・焼土粒子少量，しまる
8．極暗褐色　ローム粒子多量　炭化物中量，炭化粒子・焼土粒子少量
9．暗褐色　ローム粒子多量　炭化粒子少量，粘性あり
10．暗褐色　ローム粒子多量　炭化粒子少量，焼土粒子極めて少量，粘性あり
11．黒褐色　ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子少量，ローム多量，しまる
12．黒色　ローム粒子少量，撹乱

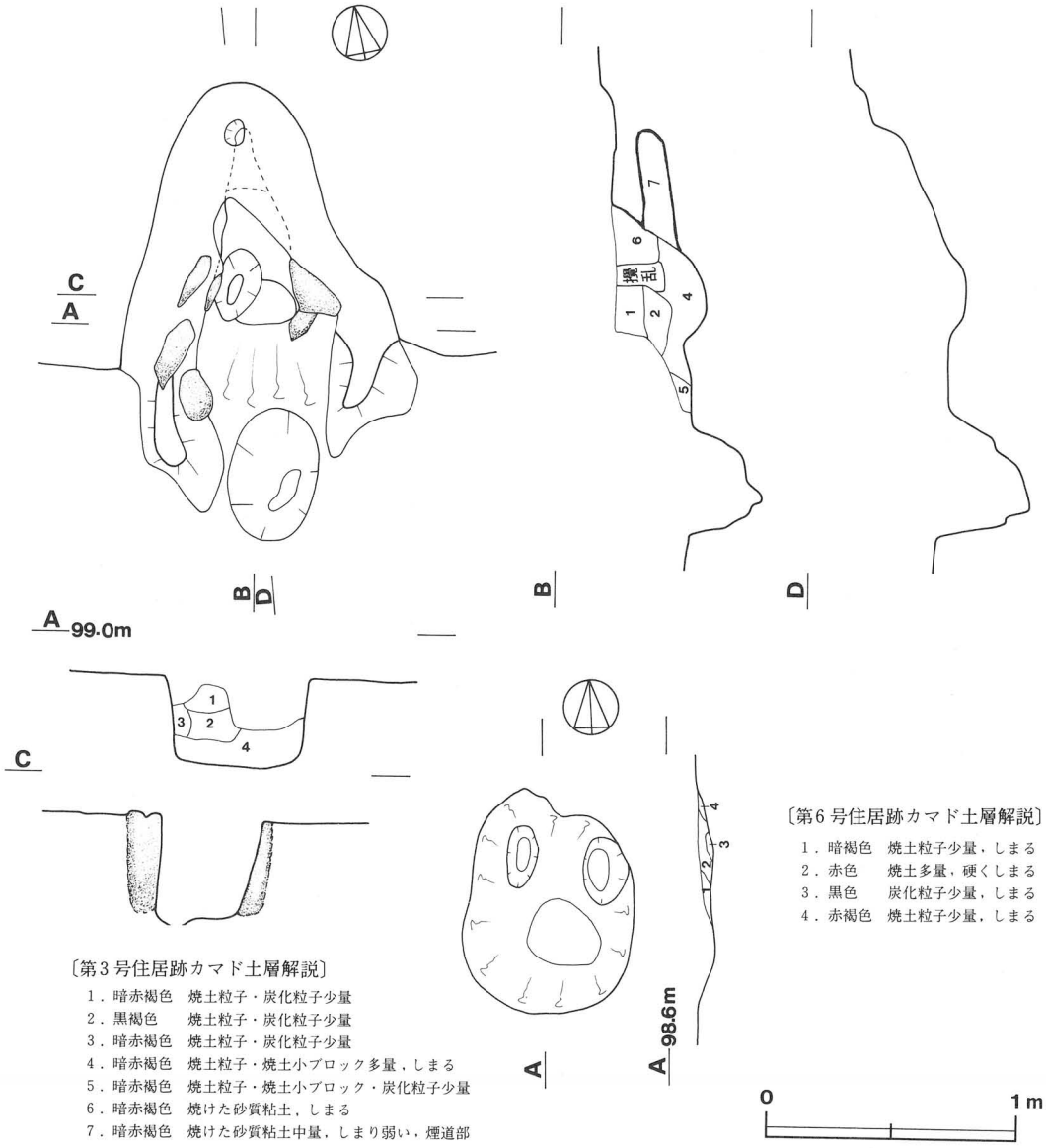
第 7 図　第3・6号住居跡実測図



第 8 図　第 3 号住居跡遺物出土状況図

覆土は，本跡の中央部にはローム粒子多量，炭火粒子少量を含む黒褐色土が，壁際にはローム粒子多量，ローム小ブロック，炭火粒子少量を含む暗褐色土が自然堆積している。

遺物は，土師器の甕５点，坏及び高台付坏13点と破片493点，須恵器片22点，灰釉陶器片３点，礫２点が出土している。



第９図　第３・６号住居跡竈実測図

2，3，4，5の甕と6，12，16，17の坏は，北西コーナー部の床面あるいは床近くに出土したもので，6の内面全体と口縁部外面には漆の皮膜が付着している。7，15の坏は竈内の覆土中から，10，11の坏は竈東側，1の甕と9の坏は南西コーナー部，8の坏は南東コーナー部のそれぞれ覆土下層から床面にかけて出土したものである。

覆土中から出土した土師器の坏の破片の中にほ，墨書されているものが3点含まれている。それらの墨書のうち1点は「依」と読めるが，もう2点は文字の一部しか残存していないため不明である。22の須恵器の坏と20，21の灰釉陶器の椀は，いずれも覆土中から出土した小片である。礫は，南壁際とP20の覆土中から出土している。南壁際のものは径35cm程の偏平なもので，その大きさと形態から踏石として利用されていたことも考えられる。

本跡は，出土遺物から平安時代（9世紀）に比定されるものと思われる。

第3号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第10図 1	甕 土師器	A (22.0) B 〔13.0〕	胴部は内彎して膨らみ，最大径を上位にもつ。口縁部は，頸部はから強く外反し，口縁端部は，上方に軽くつまみ上げられる。	口縁部内・外面ロクロナデ。胴部内面上位，横位のハケナデ。外面上位，ナデ，中位以下，縦位のヘラ削り。	長石・石英・角閃石・スコリア にぶい橙色 普通	10% P1
第10図 2	小形甕 土師器	A 9.7 B 〔6.0〕 E (10.8)	胴部は内彎して立ち上がる。口縁部は短く，頸部から「く」の字状に屈曲し，口縁端部は上方に軽くつまみ上げられる。	口縁部内・外面，ロクロナデ。胴部内面及び外面上位，ナテ。外面下位，縦位のヘラ削り。	長石・石英・チャート・角閃石・スコリア 灰黄褐色 普通	40% P6
第10図 3	甕 土師器	B 〔3.5〕 C 7.5	上げ底。胴部は外傾して立ち上がる。	胴部内面，横位のナデ。外面縦位のヘラ削り。	長石・石英・チャート・スコリア 褐灰色 普通(二次焼成)	10% P4
第10図 4	甕 土師器	A (15.9) B 〔3.8〕	胴部は内彎して膨らむ。口縁部は，頸部から強く外反し，口縁端部は，上方に軽くつまみ上げられる。	口縁部内・外面ロクロナデ。胴部内・外面上位，ナデ。	長石・石英 にぶい橙色 普通	5% P2
第10図 5	甕 土師器	A (15.0) B 〔4.1〕	胴部は内彎して膨らむ。口縁部は，頸部から強く外反し，口縁端部は，外上方につまみ上げられる。	口縁部内・外面ロクロナデ。胴部内・外面ナデ。	長石・石英 褐色 普通	5% P3
第10図 6	坏 土師器	A 13.2 B 4.2 C 6.2	上げ底気味。体部は外傾して立ち上がり，口唇部は丸い。	ロクロ整形（右回転）。内面及び体部外面，ロクロナデ。底部，回転糸切り後，周囲を回転ヘラ削りか。	長石・石英・チャート・角閃石 にぶい橙色 普通	100% P7 口縁及び内面に漆付着
第10図 7	坏 土師器	A (13.0) B 4.4 C 6.0	平底で，わずかに突出する。体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部はわずかに外反する。	ロクロ整形。内面，ヘラミガキ，黒色処理。体部外面，ロクロナデ，外面下端，手持ちヘラ削り。底部，回転ヘラ切り痕を残すナデ。	長石・石英・スコリア 浅黄橙色 普通	30% P14
第10図 8	坏 土師器	A 13.0 B 3.8 C 6.7	平底。体部は内彎して立ち上がり，口縁部はわずかに外反する。	ロクロ整形。内面，ヘラミガキ，黒色処理。体部外面，ロクロナデ，外面下端，部分的に手持ちヘラ削り。底部，ナデ。	長石・石英 灰黄褐色 普通(二次焼成)	70% P18
第10図 9	坏 土師器	A (15.5) B 5.3 C (7.5)	上げ底。体部は内彎して立ち上がり，口唇部は丸い。	ロクロ整形。内面，ヘラミガキ，黒色処理。体部外面，ロクロナデ，外面下端，ヘラナデか。底部，回転糸切り。	長石・石英・角閃石・スコリア にぶい橙色 普通	50% P10 口縁部摩滅

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第10図 10	坏 土師器	A (13.5) B 4.4 C 6.2	上げ底。体部は内彎して立ち上がり，口縁部は外反する。	ロクロ整形。内面，ヘラミガキ，黒色処理。体部外面，ロクロナデ，外面下端，手持ちヘラ削り。底部，ヘラ切り後，一方向の手持ちヘラ削り。	長石・石英 黒褐色 普通	50% P11
第10図 11	坏 土師器	A (12.0) B 4.2 C 4.8	上げ底。体部は外傾して立ち上がり，体部上位から口縁部にかけて外反する。口縁部は丸い。	ロクロ整形。内面，ヘラミガキ，黒色処理。体部外面，ロクロナデ，外面下端，手持ちヘラ削り。底部は，回転糸切り。	長石・石英・角閃石 にぶい黄橙色 普通	30% P12
第10図 12	坏 土師器	A (14.2) B 3.5 C 6.6	平底。体部は内彎して立ち上がり，口縁部はわずかに外反する。	ロクロ整形(右回転)。内面，ヘラミガキ，黒色処理。体部外面，ロクロナデ，外面下端，回転ヘラ削り。底部，回転ヘラ削り。	長石・石英 灰黄褐色 普通	35% P15
第10図 13	坏 土師器	A (12.2) B 3.9 C (5.9)	平底。体部は内彎気味に立ち上がり，口唇部は丸い。	ロクロ整形(右回転)。内面，ヘラミガキ，黒色処理。体部外面，ロクロナデ，外面下端回転ヘラ削り。底部，回転ヘラ削り。	長石・石英 にぶい褐色 普通	50% P13
第10図 14	坏 土師器	A (13.2) B 4.6 C (6.2)	平底。体部は内彎気味に立ち上がり，口唇部は丸い。	ロクロ整形(右回転)。内面，ヘラミガキ。体部外面，ロクロナデ。外面下端から底部にかけて，回転ヘラ削り。	長石・石英・角閃石 にぶい黄褐色 普通	25% P16
第10図 15	坏 土師器	A (13.5) B 4.2 C 6.0	上げ底気味。体部は内彎して立ち上がり，口縁部は外反する。	ロクロ整形。内面，ヘラミガキ，黒色処理。体部外面，ロクロナデ，外面下端，手持ちヘラ削り。底部の一部，手持ちヘラ削り。	長石・石英・スコリア にぶい黄橙色 普通	50% P 9
第10図 16	坏 土師器	B 〔2.2〕 C 7.7	平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	ロクロ整形(左回転)。内面，ヘラミガキ，黒色処理。体部外面，ロクロナデ。底部，ヘラ切り後ナデ。	長石・石英 にぶい黄色 普通	35% P17
第10図 17	高台付坏 土師器	A 15.0 B 4.8 D 9.1 F 1.3	高台は「八」の字状に開く。体部は，外傾して立ち上がり，口縁部は外反する。	ロクロ整形(右回転)。内面，ヘラミガキ，黒色処理。体部外面，ロクロナデ。高台貼り付け後，底部周囲を回転ヘラ削り。高台内・外面ロクロナデ。	細砂 にぶい黄橙色 普通	70% P 8
第10図 18	高台付椀 土師器	A (13.5) B 〔4.5〕	体部は内彎し，口縁部は強く外反する。	ロクロ整形。内面，ヘラミガキ，黒色処理。体部外面，ロクロナデ。	細砂 橙色 普通	破片 P19 体部外面に墨書「依」。
第10図 19	坏 土師器	A (13.2) B 〔2.5〕	体部は内彎し，口縁部は外反する。	ロクロ整形。内面，ヘラミガキ，黒色処理。体部外面，ロクロナデ。	細砂 にぶい黄橙色 普通	破片 P20 体部外面に墨書。破片のため解読不能。
第10図 20	椀 灰釉陶器	A (15.7) B 〔2.2〕	体部は外傾して立ち上がり，口唇部は丸い。	ロクロ整形。体部内・外面，ロクロナデ。釉は付けがけ。	精良 灰白色 普通	破片 P21
第10図 21	椀 灰釉陶器	A (13.4) B 〔2.2〕	体部は外傾して立ち上がり，口唇部は丸い。	ロクロ整形。体部内・外面，ロクロナデ。釉は，内・外面とも発色良好。	精良 灰白色 良好	破片 P22
第10図 22	坏 須恵器	A 〔2.5〕 C (8.0)	平底。体部は外傾して立ち上がる。	ロクロ整形。内面と体部外面，ロクロナデ。底部，ナデ。	長石・石英 灰オーブ 普通	破片 P23
第10図 23	坏 土師器	B 〔3.3〕	体部は内彎し，口唇部は丸い。	ロクロ整形。内面，ヘラミガキ，黒色処理。体部外面，ロクロナデ。	長石・石英 にぶい黄橙色 普通	破片 体部外面に墨書。破片のため解読不能。

A…口径，B…器高，C…底径，D…高台径，E…胴部最大径，F…高台高，（ ）は推定値，〔 〕は現存値

第 10 図　第 3 号住居跡出土遺物実測図

第４号住居跡（第11図）

本跡は，調査区の西部に確認された住居跡で，第２号住居跡の西側22．3m に位置している。

平面形は，土砂流失防止のために土手を構築した際に南壁が削平され，南北の長さは不明であるが，東西2.14ｍの方形又は，長方形を呈するものと思われ，主軸方向はＮ－82°－Ｗを指している。壁は，攪乱のため不明の南壁を除いてはほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は，５～９㎝である。

床面は，ほぼ平担でロームがよく締まっている。

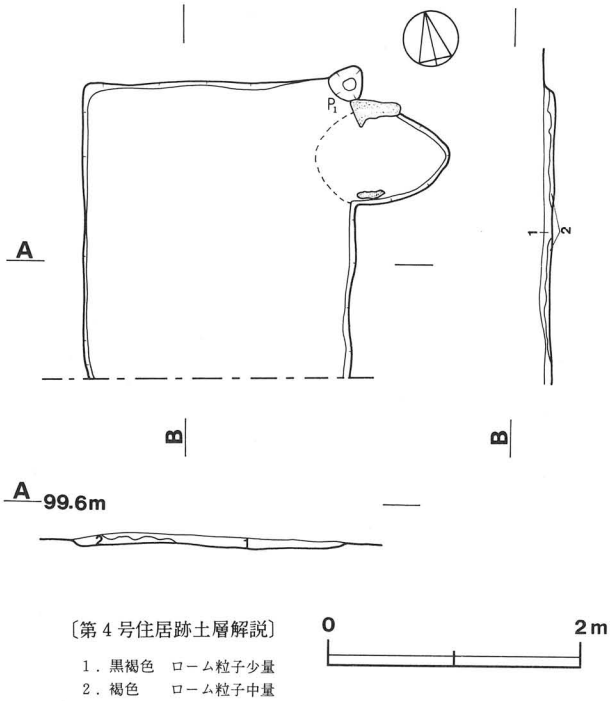
ピットは，北東コーナー部よりに１ケ所検出されており，長径28㎝，短径26㎝である。

竈は，東壁の北東コーナー部よりに付設されているが，耕作による攪乱を受けているため天井部・袖部は削られており，形状・規模等の詳細は不明である。覆土は，焼土粒子を含む暗赤褐色土が堆積している。火床の規模は，長径103㎝，短径80㎝の楕円形を呈し，床面を10㎝ほど掘りくぼめている。

覆土は，上層にローム粒子を少量含む黒褐色土が，下層には，ローム粒子を少量含む褐色土が堆積している。

遺物は，土師器片41点が床面近くから出土しているが，いずれも小片であり，復元は不可能である。

本跡は，出土遺物から平安時代（９世紀）に比定されるものと思われる。



第11図　第４号住居跡実測図

第５号住居跡（第12図）

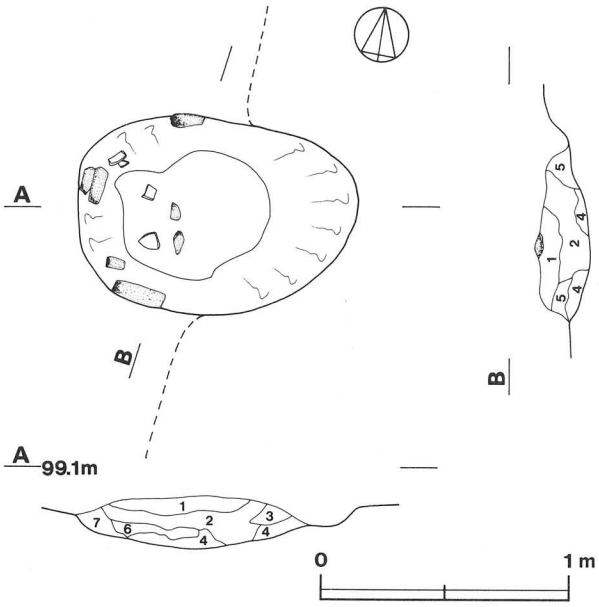
本跡は，調査区の南部に確認された住居跡で，第３号住居跡の北側2.4m に位置している。

本跡は，ローム面への掘り込みがほとんどなく，竈しか確認できず，形状・規模等については不明である。

竈は，天井部と袖部は崩れており，わずかに袖部の一部に使用したと思われる白谷石が検出されただけである。規模等の詳細については不明であるが，覆土上層には焼土粒子を多量に含む赤褐色土が，下層には焼土粒子を少量，焼土ブロックを極少量含む明赤褐色土が堆積している。火床は，長径113 cm，短径 80 cm，の楕円形を呈し，床面を深さ18cmほど掘り込んでいる。

遺物は，土師器の甕１点，椀２点と破片10点が出土している。いずれも竈の覆土中から出土したもので，２は高台付きの椀の底部である。

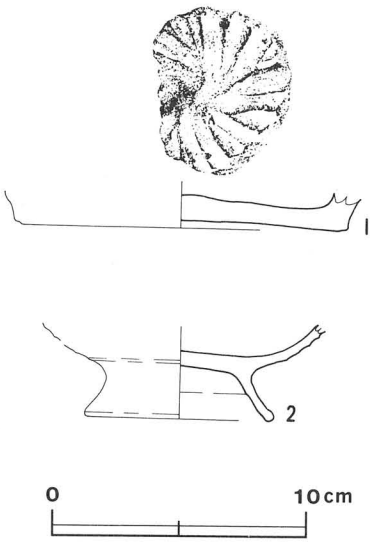
本跡は，出土遺物から平安時代（９世紀）に比定されるものと思われる。



〔第５号住居跡カマド土層解説〕

1．赤褐色　焼土粒子多量，ローム粒子極めて少量，しまる
2．赤褐色　焼土粒子多量，焼土ブロック極めて少量，しまる
3．暗赤褐色　焼土粒子多量，ローム粒子少量，しまる
4．暗赤褐色　焼土粒子少量，焼土小ブロック極めて少量，ローム粒子中量
5．暗赤褐色　焼土粒子多量，ローム粒子少量
6．明赤褐色　焼土粒子多量，硬くしまる
7．暗赤褐色　焼土粒子少量，ローム粒子極めて少量

第12図　第５号住居跡竈実測図



第13図　第５号住居跡出土遺物実測図

第５号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第５図 1	甕 土師器	B 〔1.8〕 C (13.0)	上げ底。胴部は外傾して立ち上がる。	胴部外面下端，ヘラ削りか。底部内面中央に，菊花状の粘土掻き取り痕。	長石・石英・角閃石 にぶい橙色 普通	底部破片 P２
第５図 2	高台付椀 土師器	B 〔3.6〕 D 7.5 F 1.8	高台は「八」の字状に開く。体部は内彎して立ち上がる。	ロクロ整形。内・外面とも，ロクロナデ。底部，糸切り痕を残す。高台は，やや中心を外して貼付ける。	長石・石英・微砂粒・スコリア 橙色 普通	35% P１

A…口径，B…器高，C…底径，D…高台径，E…胴部最大径，F…高台高，（　）は推定値，〔　〕は現存値

第６号住居跡（第７図）

本跡は，調査区の南部に確認された住居跡で，第３号住居跡と重複しているが，本跡の竈を壊して，前述の住居跡の貼り床が認められたことから，本跡のほうが古いものと思われる。

形状・規模等については，竈とピットしか確認できず不明である。

本跡に伴うピットは，調査した部分から推定すると，P_{20}～P_{25}と思われる。P_{20}・P_{22}・P_{24}・P_{25}は，長径40～89cm，短径17～80cm，深さ17～80cmで，規模や配列等から主柱穴と思われる。

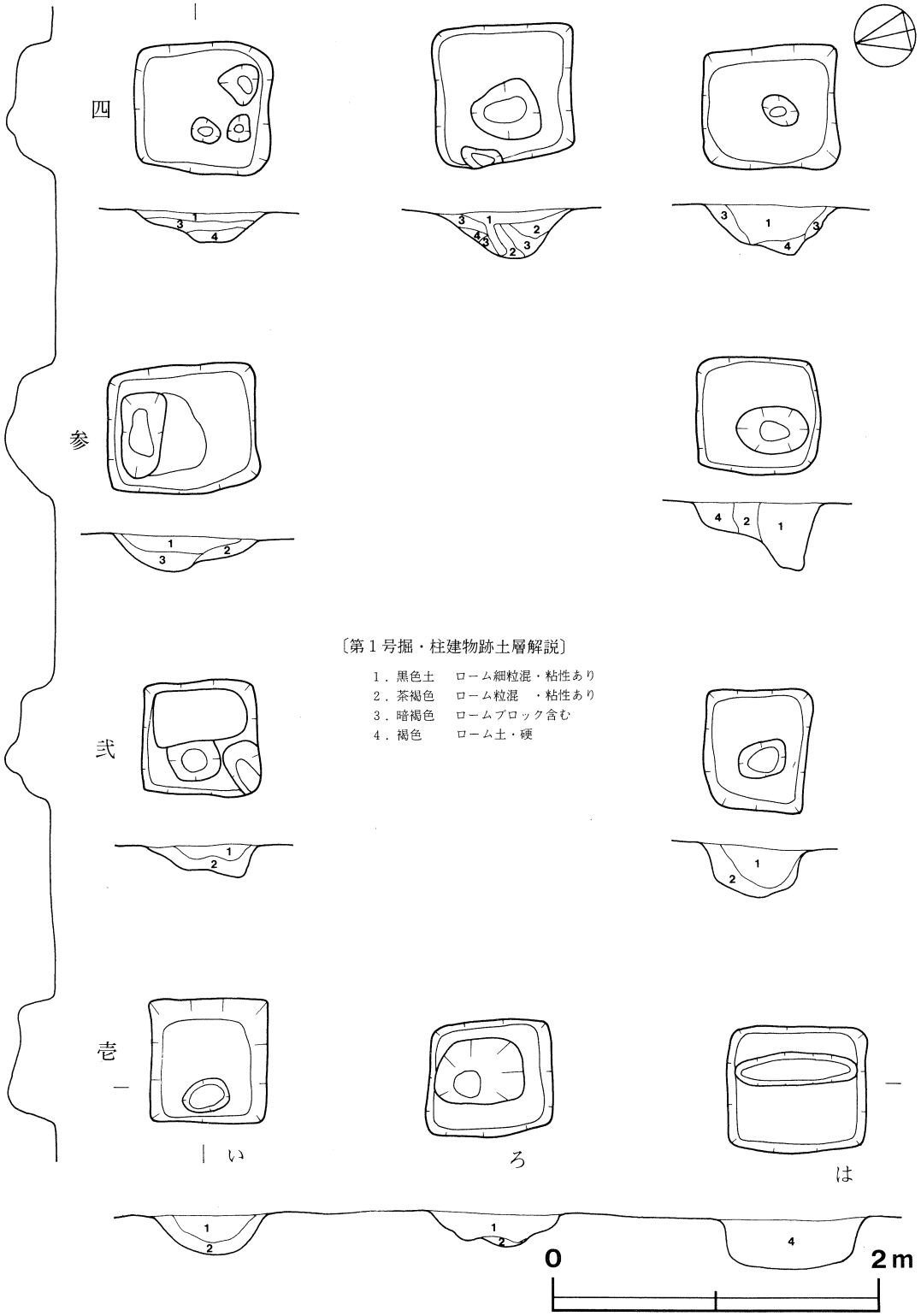
竈は，前述したように第３住居跡に壊されているため形状・規模等の詳細は不明である。火床は，長径90cm，短径68cmの不整楕円形を呈し，床面を７cmほど掘りくぼめている。焼土がレンガ状に赤化して多量に堆積している。また，火床北側よりには，２か所のくぼみが検出され長経25·27cm，短径14·19cm，深さ12·14cmの楕円形状を呈している。これらのくぼみは，第３・５号住居跡内竈に使われていたものと同様な白谷石が設置されていた可能性が考えられる。

本跡に伴う遺物は確認されていない。

２　掘立柱建物跡

第１号掘立柱建物跡（第14図）

本跡調査区の西部から，掘立柱建物跡１棟が検出された。確認された建物遺構は，第４号住居跡の北1.5m に位置し，桁行３間（約6.0m）×梁間２間（約3.5m）の東西棟である。柱穴掘方はいずれも，１辺90cm程度の隅丸の方形で，深さは20cm～50cmと浅いが，これは農耕作業による地山面の攪乱によるものである。柱痕跡は，明確に検出はできなかった。遺物は，弐・は弐から土師器と須恵器の小片３点のみである。構築時期は，調査区Ａ・Ｂ・Ｃから検出確認された，竪穴住居跡関連の建物跡と見られるので，平安時代の遺構と考えられる。

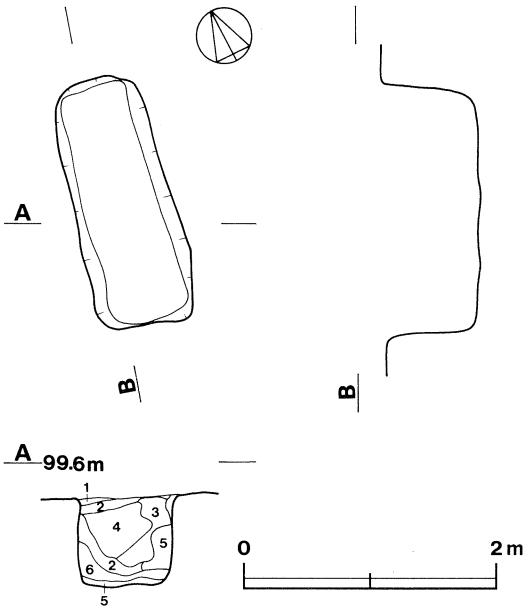


第 14 図　第１号掘立柱建物跡実測図

3　土坑

第１号土坑（第15図）

本跡は，調査区の北部，第１号住居跡内に確認された土坑である。本跡の上面に同住居跡の貼り床が確認されていることから，本跡の方が古いものと思われる。



〔第１号土抗土層解解説〕

１．褐色　　ローム多量，硬くしまる
２．褐色　　ロー粒子中量
３．暗褐色　ローム粒子少量，しまる
４．黒褐色　ローム粒子少量
５．明褐色　ローム多量，粘性あり
６．褐色　　ローム中量，粘性あり

第15図　第１号土坑実測図

平面形は，長軸1.99m，短軸0.83mの長方形を呈し，長軸方向は，N－9°－Eを指している。

遺構確認面から坑底までの深さは76cmほどである。壁はほぼ垂直に立上がり，底面はややゆるやかな起状が認められ，ロームがよく締まっている。

覆土は，上層が第１号住居跡の貼り床のためロームが硬く踏み固められているが，中層から下層にかけては自然堆積の様相を呈している。中層はローム粒子を含む黒褐色土が，下層には，粘りのある褐色土が自然堆積している。

遺物は，出土していない。

まとめ

松原遺跡の発掘調査によって，検出された遺構・遺物について以上記述したが，遺跡の調査面積が小範囲であるため，松原遺跡全体の性格を知ることは出来ない。検出された6軒の住居跡を時代的にみると，平安時代（9世紀）に位置付けることが出来る。出土した土師器をみると，底部整形痕に多少のちがいは認められたが，同時期のものとみることができる。平安時代に比定される，住居跡からの出土土器としては，内黒の土器に代表される。各住居跡の複合関係についてみれば，第3号住居跡は，第6号住居跡と重複しているが，第3住居跡のほうが新しい。また掘立柱建物跡が1棟検出されたが，他の遺構との切り合いがない単独遺構なので，各遺構の前後関係については不明だが，同時代集落内の建物と思われる。

注目される出土遺物としては，漆皿と墨書土器をあげることが出来る。第2号住居跡内の中央炉近くから出土した，坏形土器内に黒褐色の固形物が付着して発見された。この固形物を観察した結果，漆液の凝固したものと判明した。第3号・6号住居跡内からも，漆付着土器が出土している。これらの漆関係遺物と，住居跡との相互関係については不明であるが，漆工の工人の存在も考えられるところである。本調査と直接関係ないが，作業休憩時の雑談で，「この緒川地方は漆の産地として，会津（福島県）漆器業者の需要に応じていたとも，また小瀬宿（緒川村）に漆屋の屋号をもつ業者が，明治頃まで残っていたとも言ってくれた」。このことは，当地方が古くから漆の供給産地でもあったことを，思わせる言葉であろう。

墨書土器は，破片のため解読できないが，「依」と明らかに読める墨書について一考したい。墨書土器には，地名・人名・役所名などを示すものが多く，奈良・平安時代の遺跡から多く出土し，墨書される部位は，皿・坏の体部・底部の内外面に焼成後墨書されたもので，遺跡の性格を考察する有力な材料と見られるものである。現在の大子地方（久慈郡）は，古代「依上郷」の地域で，のち「依上保」と呼ばれ当時陸奥白河郡に属した国衙領であった（『大子町史』）。本遺跡出土の墨書土器破片「依」の一字をもって，「衣上保」と付会することは出来ないが，古代那珂郡衙の所在地に擬されている那賀皇都原（緒川村那賀）が本遺跡の近くに在ることから，国衙関係役人級の往来も考えられぬこともない。

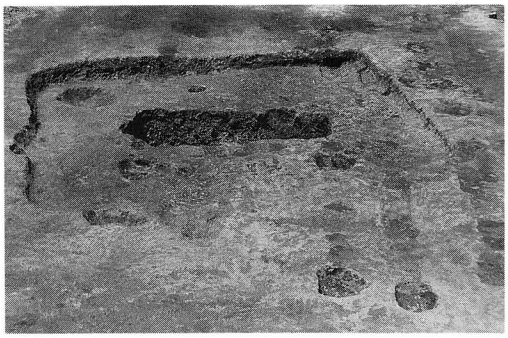
今回の調査によって，竪穴住居跡や掘立柱建物跡を確認できたことは，緒川村地域では，未発見のものであっただけに，当地方の古代集落の様相を探る上で貴重な発見だった。

以　上

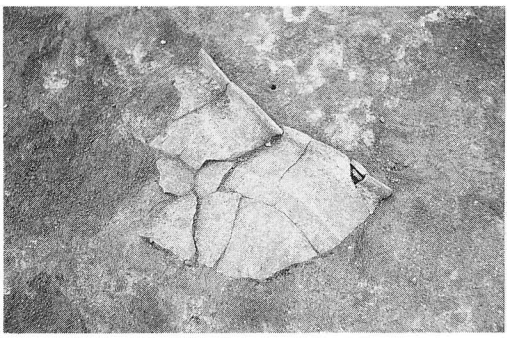
写　真　図　版

松　原　遺　跡

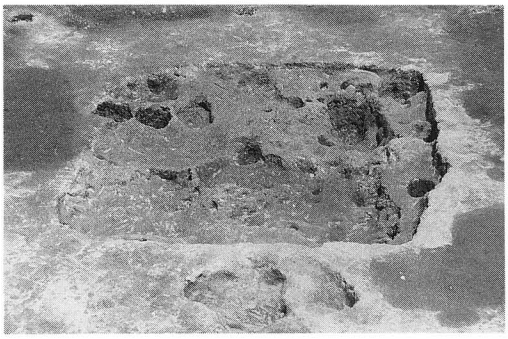
松原遺跡遠景



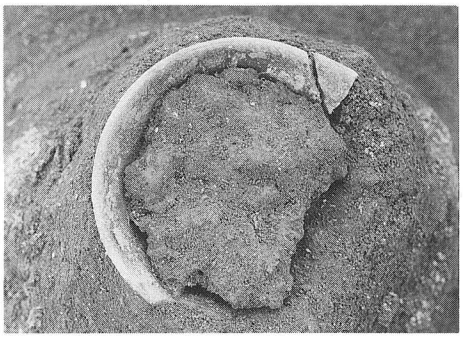
第1号住居跡全景



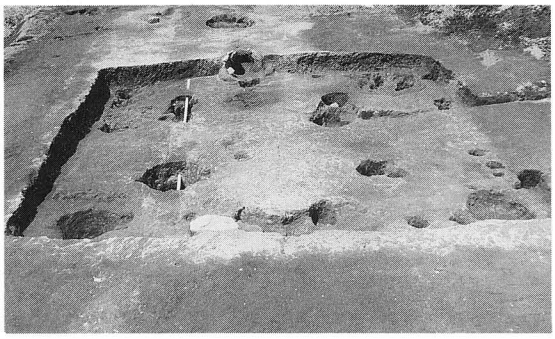
第1号住居跡遺物出土状況



第2号住居跡全景

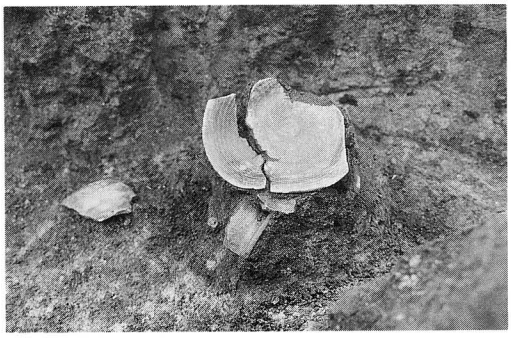


第2号住居跡遺物出土状況

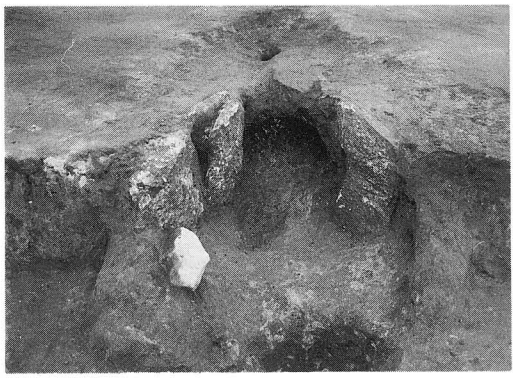


第3号住居跡・第6号住居跡全景

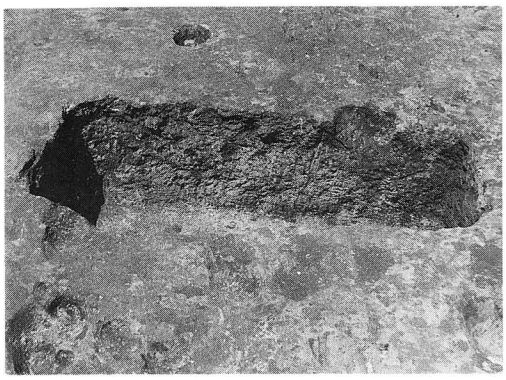
第3号住居跡遺物出土状況



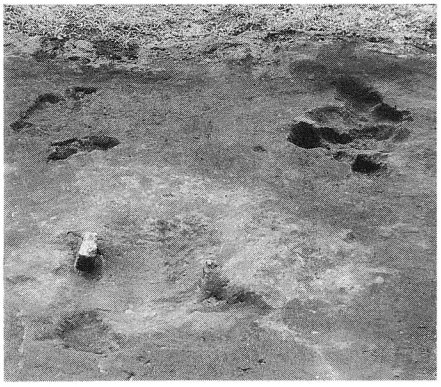
第3号住居跡遺物出土状況



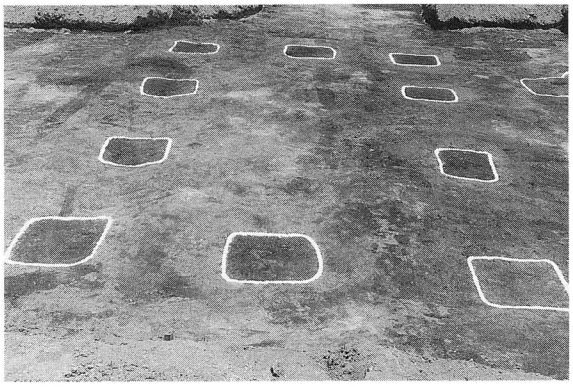
第３号住居跡竈全景



第１号土坑全景

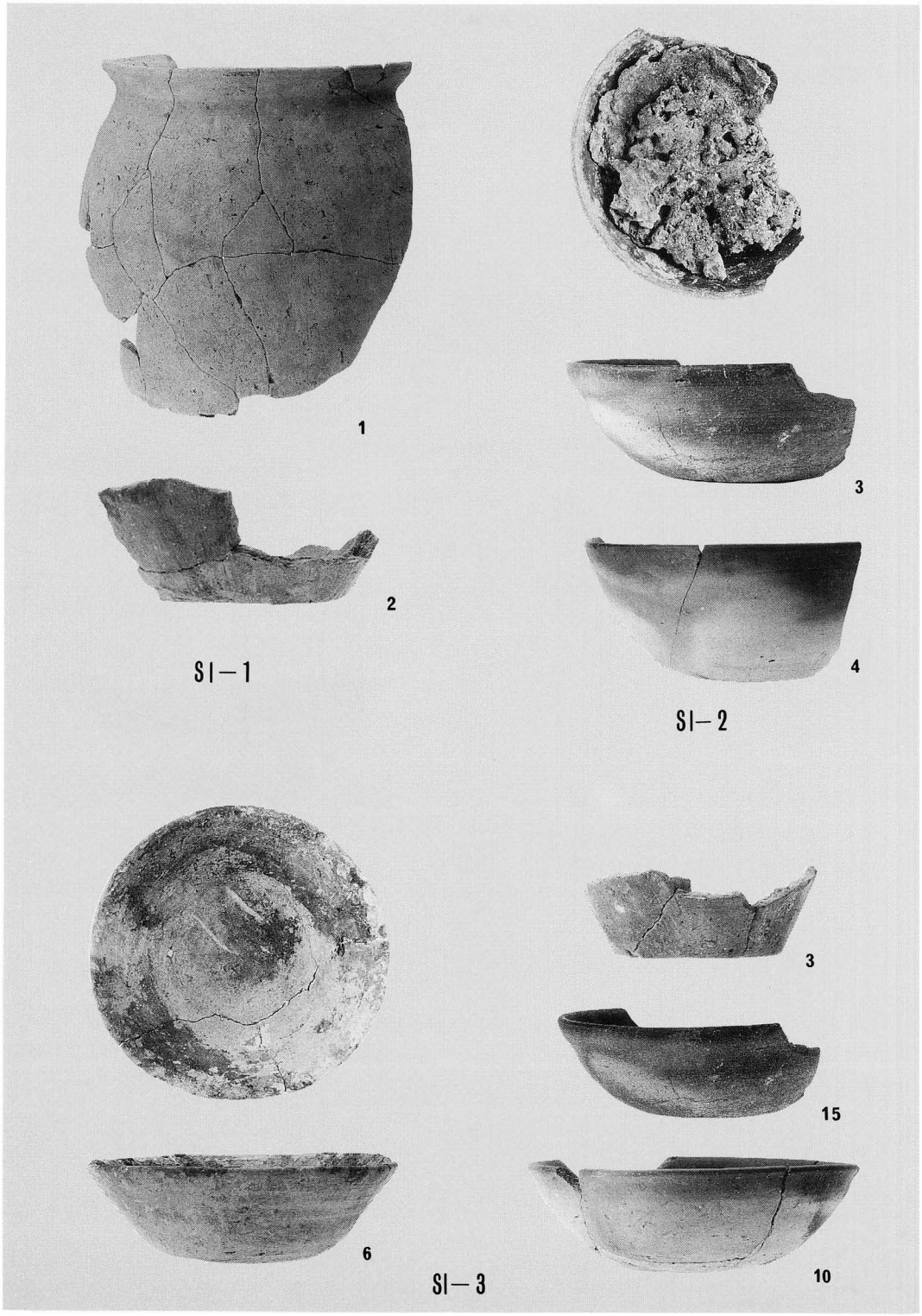


第５号住居跡竈全景

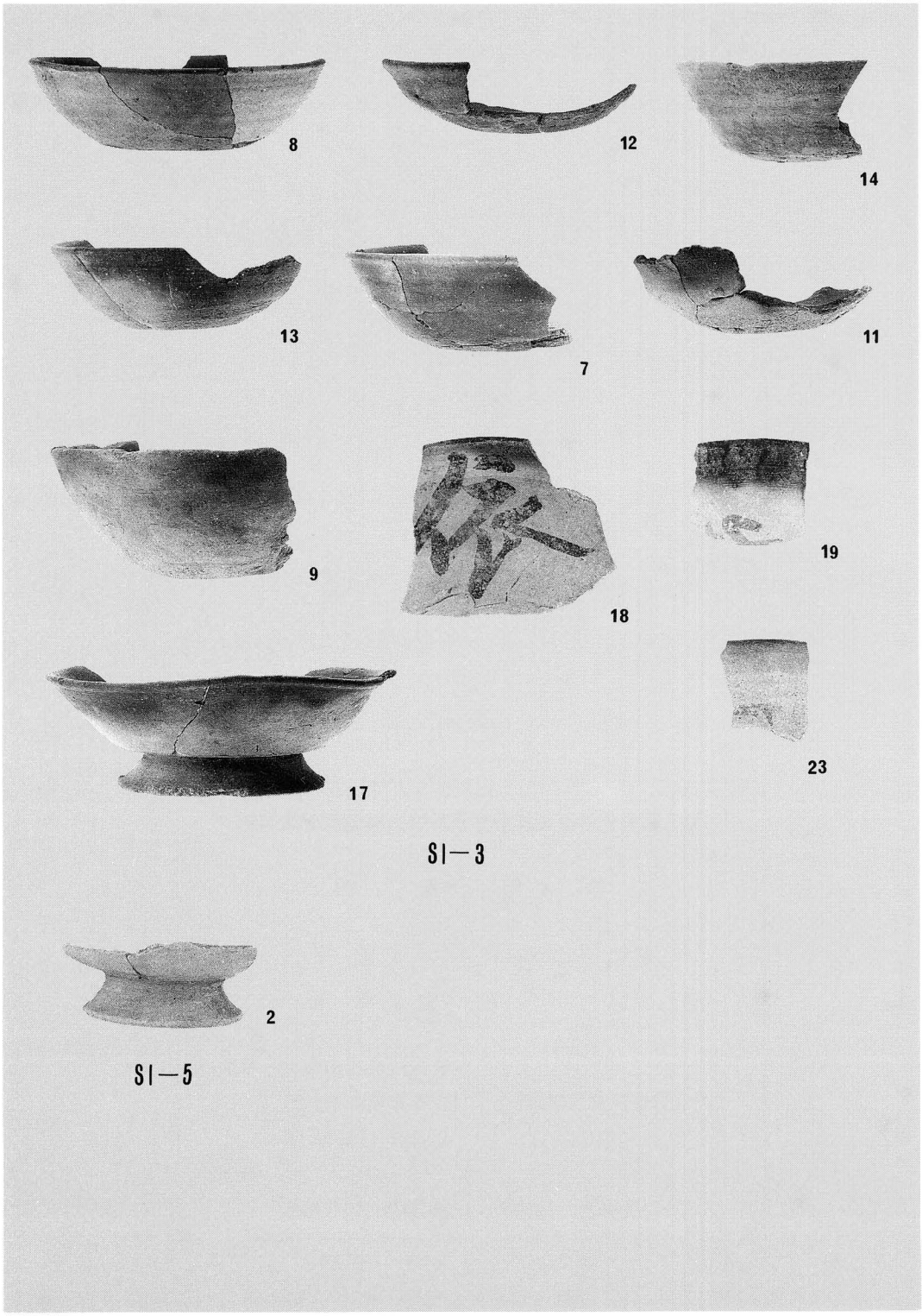


第１号掘立柱建物跡確認状況

現地説明会風景



第１・２・３号住居跡出土遺物



第３・５号住居跡出土遺物

茨城県那珂郡緒川村埋蔵文化財調査報告書第２集

松　　原　　遺　　跡

平　成　4　年　1　月　15　日　　印刷

平　成　4　年　2　月　1　日　　発行

発行　松原遺跡発掘調査会

茨城県那珂郡緒川村上小瀬2027(教育委員会内)

TEL　02955-6-2111

印刷　コ　ム　ロ　印　刷

茨城県那珂郡緒川村上小瀬1921　TEL02955-6-2433